

## オーストラリア経済学史学会創立 25 周年を記念して

田 中 敏 弘

オーストラリア経済学史学会の創立会議が開催されたのは、1981年5月8日～9日、シドニーから北へ約50キロ、アーミデイルにあるニューイングランド大学においてであった。

主催校の J. プレンと J. C. ウッドをオーガナイザーに、オーストラリア在住の20人と、外国からはイギリス、アメリカ、カナダからの参加者がなく、私が唯一日本人の経済学史学会を代表して加わり、計23人が集まった。

あれから25年が経過し、今年は25周年の記念すべき年を迎えた。創立会議に参加して以来親交を保ってきたシドニー大学のグロンベゲン教授から、昨年のクリスマスにいつものカードと共に、オーストラリア経済学史学会 (HETSA) の機関誌、*History of Economic Review* (No. 43, 2006) で、“HETSA’s Silver Jubilee”という創立会議の参加者を中心に回想的なショート・コメントを編集するので、短いものを寄せてほしいとの依頼があった。この企画に賛同して私が寄せたのが“Australia and Japan and the Study of the History of Economic Thought” (pp. 15-17) である。

この企画には、創立会議参加者のうち、P. D. グロンベゲン、T. エンドレス、G. ハーコート、M. シュナイダー、M. ホワイトに私を加えた6名がコメントを寄せている。また、15葉の写真まで掲載されていて、そのうち創立会議の写真3葉は、グロンベゲンが書いていることから、やっと思い出したのだが、私が会議の直後に彼に送っていたものだった。

これらの回想的コメントを読むと、やはり1つの学会が立ち上げられるときの経済学史研究者としての志と熱気が鮮明にみえてくる。研究報告もとくに選ばれた質の高いもの

だったし、何よりもたっぷり1時間をかけてのディスカッションは、オーストラリア流のストレートな批判が熱っぽい建設的な討論に満ち溢れていた。それは日本の発足当時の関西部会での討論によく似ており、ときにそれを超えるほどのものと、私の目には映った。報告者は5名と Research in progress session (いわゆる院生報告) の1名の計6名だった。

経済学史学会から推薦を受け、日本学術会議から派遣された私は、帰国後間もなく2つのレポートを書いた。1つは、一般向けに『経済セミナー』(No. 320, 1981年9月)に「生まれたての経済学史学会」としてやや詳しく、もう1つは、『経済学史学会年報』19号(1981年11月)にある。

会議での研究報告は、シュナイダーの「過少消費論のエッセンス」、院生のホワイトによる「オーストラリアにおけるジェヴォンズ」、グロンベゲンの「テュルゴー、ベッカリア、スミス」、B. ゴードンの「聖書における稀少性問題」、H. マックブートの「ジェイムズ・ウィルソンと1847年商業恐慌」、ハーコートの「マーシャル、スラッフア、ケインズ—同床異夢か?」の順に行われた。

当時の私の関心からとくに印象的だったのは、ホワイト、グロンベゲン、ハーコートの3報告だった。ホワイトは今では世界のジェヴォンズ研究の第一人者の一人であり、井上琢智会員との共同の仕事でも知られている。グロンベゲンについては、大著マーシャル伝の著者として、またとくに極めて幅広い学史研究によって著名で、2005年にはアメリカの経済学史学会 (HES) から Distinguished Fellow として表彰されたことは言うまでもない。また、ハー

コートは当時すでに『ケンブリッジ資本論争』(1972年)の著者としてよく知られており、会議では別格のおもむきさえ感じられた。

「生まれたての経済学史学会」で書いたが、報告と討論とのあいだ、「ペーパー」が「パイパー」と聞こえ、「ケインズ」が「カインズ」になるオーストラリアのアクセントに悩まされたが、間もなく慣れてきて楽しくなったのを覚えている。もちろん私自身の英語は棚上げにしての話である。

この会議で、今思い出しても強烈な印象を受けたのは、ディナーでのハーコートスピーチだった。われわれはハーコート節をそこでたっぷりうかがうことになったのだが、「私の最も尊敬する2人の偉大な教師」と言いながら、彼がテーブルの右前にスラッフアの額入り写真を、そして左前にはさらに大きな額に入ったジョン・ロビンソンの写真を置いて話し出したことだった。私は思わず「シュライン」と言ってしまった(上記『経済セミナー』には私の撮った写真が掲載されている)。今回の創立記念の回想で、ホワイトがこれに触れて、“Geoff had placed framed photos of Joan Robinson and Piero Sraffa in front of him. With some lighting by candles, the effect was similar to a shrine” (pp. 17-18) と、同じく回想しているのがうなずける。

総会で学会名はオーストラリアの経済思想史を中心とした学会という誤解を避けるため、Australian History of Economic Thought Society ではなく、History of Economic Thought Society of Australia (HETSA) と決まった。この学会はイギリスの経済思想史会議をモデルに会長や役員を置かず、会議は持ち回りとされた。しかし実質上はグロンベージェン氏が1989年まで会長の任に当たることになった。そして『ニューズレター』第1号が1981年冬に出されることとなった。これはのち1986年に『ブリテン』と変わって1990年まで続き、現在の正式な機関誌 *History of Economic Review* の第1号に発展したのが1991年である。

総会会議で私は短い英文の「日本の経済学史

学会」を配布し、簡単に説明することができたが、これは *HETSA Newsletter*, No. 1 に掲載された。これが機縁でそれはアメリカの *HES Bulletin*, 3(2), 1982 に再録されることになった。また、私は日本からの通信員を依頼されたので、日本の学史学会の活動をかなりの間毎回報告し、それらが *Newsletter* などに掲載された。

こうして HETSA が誕生し、日本との交流が開始されていった。1987年の第4回大会に杉山忠平会員が参加され、以降1993年第7回大会は、橋本比登志、塘茂樹、葛西孝平の3氏が報告している。その後では、私の調べた限り、95年、99年、2000年、2001年と参加者、報告者が増加しており、詳細は省略せざるをえないが、2001年まででみても、15名を超える会員が参加者、報告者となっている。

創立会議以来、私は公私共に出来るだけ密接に連絡を保持してきたが、この機会にとくにグロンベージェンとプレン両氏との交流について触れておきたい。

グロンベージェンがシドニー大学から編集・刊行していた、氏の解題の付いた「経済学古典プリント」の日本の学史学会会員に対する頒布に協力したことがその1つである。とくに財政的に厳しい状況下にあったとき、氏からの依頼で補助金が継続されるように、リプリント・シリーズの研究上の意義を訴える文章を彼に送ったこともあった。

このリプリント・シリーズは1982年に第1号、[W. Pulteney], *Some Thoughts on the Interest of Money in General* (1738) が刊行されてのち、ケネーの *Farmers* (1756) とチュルゴの *Sur la Grande et la Petite Culture* (1766) の英語訳、トレンズの *The Economists Refuted* (1808) and other Early Economic Writings, Piero Verri, *Reflections on Political Economy* (1771) の英訳版、マーシャルの *On the Method and History of Economics* (Circa, 1871), チュルゴの *Extracts from His Economic Correspondence with Du Pont de Nemours, David Hume, Josiah Tucker, Condorcet,*

*Morellet and Others* (1765-78) (英訳), デュボン・ド・ヌムールの *The Origin and Progress of a New Science* (1768) (英訳), Thomas Took, *Considerations on the State of Currency* (1826), John Asgill, *On Land Banks* (1696) and *Charity* (1731), ボワギルベールの *Discourse on the Nature of Wealth* (英訳) など, 10 点以上に及んでいる。当時はこれらのリプリントはとくに貴重な資料であり, その貢献は小さくなかった。

次に, これは私事にわたるが, 1990 年に私が『古典経済学の生成と展開—古典経済学研究 II』を編んださい, 氏から論文 “Marx’s Conception of Classical Political Economy: An Evaluation” を寄稿していただき, その邦訳を収録することができたことである。

さらに, とくに氏に感謝したいのは, 1995 年 1 月の阪神大震災による被害のため, ロッテルダムのエラスムス大学で開催された第 1 回「ヨーロッパ経済学史学会議」に出席できなくなったとき, やむなく急遽マーシャル研究家としての氏に私のペーパー, “J. B. Clark and Alfred Marshall: Some Unpublished Letters” の代読を快く引き受けていただいたことである。

マルサス研究家として著名なブレン氏との関係については, まず私が学史学会の代表幹事だった 1992 年に学会から正式に大会へ招聘し, マルサスに関する共通論題と関連して, 「なぜ現代の経済学者はマルサスの『経済学原理』を読まなければならないか」という講演をしてもらったことである。同時にこの機会に関西学院

大学やその他の諸大学でセミナーを開き, マルサス研究をめぐって交流が進んだ。

第 2 に, ブレン氏と日本との密接な関係は, よく知られているように, 関東学園大学所蔵の未公表のマルサス文書を T. H. バリー氏と共に編集したことによく表れている (John M. Pullen and Trevor Hughes Parry (eds.), *The Unpublished Papers in the Collection of Kanto Gakuen University*, vol. 1. 1997, vol. 2, 2004, Cambridge University Press)。この困難な編集作業を通じての世界のマルサス研究への貢献は, 日本とオーストラリアの具体的交流の 1 つの成果と言えないであろうか。

この創立 25 周年という 1 つの区切りを機会に, HETSA と JSJET の一層の発展と共に, 両学会の交流のさらなる深まりと新たな展開を願ってやまない。

最後に一言加えて終わりたい。オーストラリアの *Review* とも関連して思うことは, われわれの『年報』の『経済学史研究』(年 2 回) への発展, 英文論文の次第の増加の方向をさらに進める機会が近づいていることである。世界で最も古く, おそらく最大の会員を擁するわれわれの JSJET が国際交流をさらに一歩進めるために, 世界に開かれた独立した英文ジャーナルを手にすることが望まれる。12 年前に言われた「時期尚早」の声は, 通信手段の大きな進歩と会員の十分な力量によって, 今や消滅しつつあるのではなかろうか。英断が望まれる。

田中敏弘：関西学院大学名誉教授  
(2006 年 8 月受理)